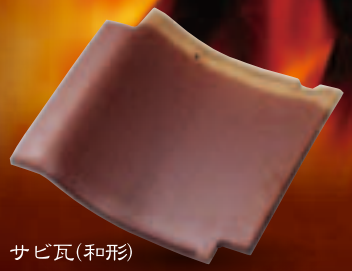
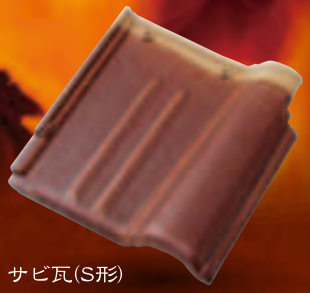
千三百度以上という
焼成温度に挑む修羅場

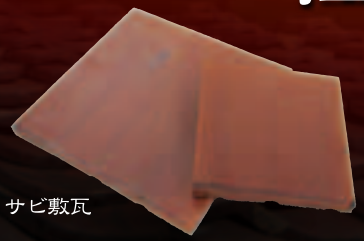
石州本来待瓦窯元

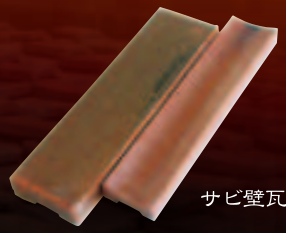
亀谷窯業有限会社

亀谷家が造る石州瓦は、強くて堅く、凍てに強い…という唯それだけにこだわった瓦です。
そのこだわりは、陶器でありながら千三百度の焼成温度を守り抜くというきわめて素朴で判りやすいという一点にあります。
焼き上がりは、明らかに堅牢で、指で弾くと聡明な金属音を奏でるほど。触ってみると違いが判る。そんな瓦です。


サビ瓦(和形)


サビ瓦(S形)


サビ敷瓦


サビ壁瓦

郵便番号 六九七ー〇〇二三
島根県浜田市長沢町七三六
電　話（〇八五五）二二ー一八〇七
ファックス（〇八五五）二二ー〇六二二
URL：http://user.iwanicatv.jp/honkimachi/
E-mail：honkimachi@iwanicatv.jp

二百年前の匠の技が現代に活かされつ。
本物はやはり継承されていく。
亀谷家一子相伝のモノ造りがここにある。

石州「本来待」亀谷瓦謹製

サビ敷瓦

「受注限定生産品」

創業二百余年 寛延元年より受け継がれた一子相伝の技。

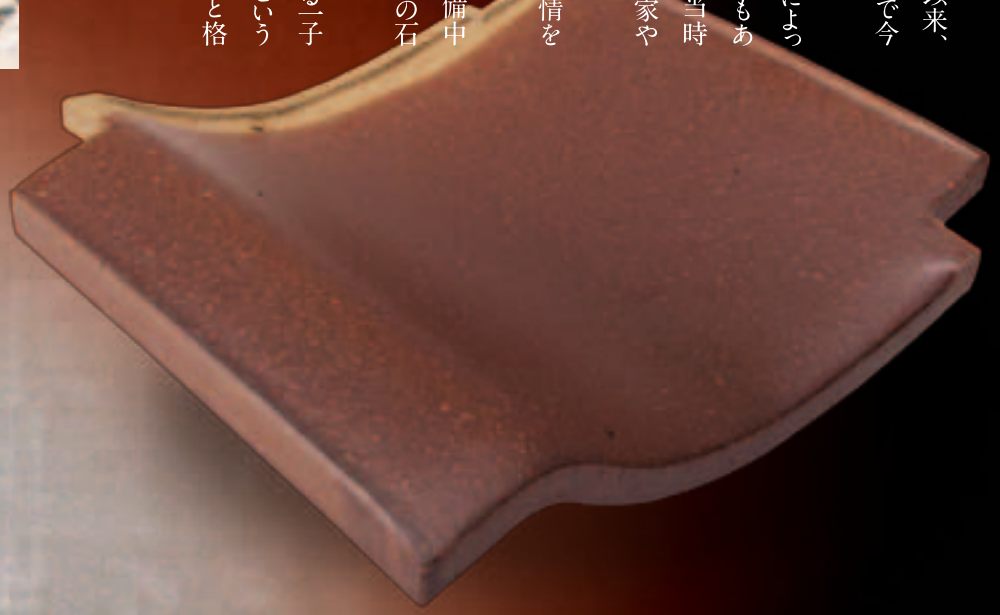
文化三年（一八〇六）、浜田松平藩から瓦株を受けて以来、石州本来待瓦「せきしゅうほんきまちがわら」の製造一本で今日在り続ける亀谷家。

登り窯の時代、窯内のかすかな温度差と炎の加減によって微妙な色ムラが生じていました。品質上は何の問題もありませんでしたが、不揃いで素材感まるだしの表情が当時敬遠され、武家や富裕な層では敬遠され、もっぱら商家や庶民の住まいに使われていきます。

やがて、この瓦たちは、光沢が静かで淡く沈んだ風情をかもす一品として「さび瓦」と呼ばれるようになります。

世界遺産石見銀山大森の町並みやベンガラで著名な備中吹屋の町並みなど今に残る歴史的町並みの多くは、この石州錆瓦で飾られています。

現在、八代目当主亀谷克幸氏は、亀谷家に伝わる一子相伝の錆瓦造りを、さらなる未来に継承していきたいという想いを抱きながら、手造りの冴をもって、今も土と炎と格闘しています。



堅牢を生み出す千三百度にもなる「窯温度」、陶器というよりむしろ磁器を焼成するに等しい厳しい修羅場。

一口に千三百度と言っても陶器の焼成では日本一の温度であり、磁器タイルの焼成や板ガラスの製造温度帯に匹敵します。先に紹介したように、この温度に耐える耐火度の高い陶土は日本でも数える程しかありません。ましてや瓦に用いるのは石州瓦だけです。そんな中、当社は伝統技法に基づき二十二時間に及ぶ超高温焼成を頑なに守っています。とりわけ、最後の二時間強は連続して千三百度に及ぶ超高温焼成に費やし、あくまでも、堅牢性にこだわります。焼き上がりは、明らかに堅く重く、聡明な金属音を奏でるまでに変化します。

施工写真群

北海道本願寺派　江刺別院庫裡
北海道檜山郡江差町

北海道本願寺派　江刺別院本堂
北海道檜山郡江差町

サビ敷瓦：施工例

サビ敷瓦：施工例